

# 『元朝秘史』におけるチンギス・カンの死

～イエスイとトルン・チェルビが関わっていたという仮説に基づいて～

## The Death of Činggis Khan in the *Secret History of the Mongols* : Based on the Hypothesis that Yisüi and Tolun\_čerbi were involved

藤井真湖

Mako Fujii

### Abstract

The cause of Činggis Khan's death is still a matter of historical speculation. There is no mention of the cause of Činggis' death in the *Secret History of the Mongols*. In this paper, we hypothesize that two close associates of Činggis Khan, his wife, Yisüi, and his chamberlain, Tolun\_čerbi were involved in his death. It argues that these two individuals made the assassination of Činggis Khan possible, both in motive and in physical and spatial terms. In the course of our discussion, we point out that these two individuals assassinated Činggis Khan for two reasons. One was to take revenge on Činggis Khan, and the other was to defend his honor by watching him make deranged political decisions in his dying moments.

### キーワード

英雄叙事詩, 構造分析, チンギス・カン, イエスイ后, トルン侍従, ブルカン王

### はじめに

世界史において名を轟かせたチンギス・カンの死は今なお謎に包まれているが、『元朝秘史』においては、その死は続集巻二の § 268 において次のように記されている。

タングートの民は、言葉を言って、その言葉に至らないがため、タングートの民にチンギス・カアンは再び遠征して、タングートの民を殲滅して帰ってきて、亥の年（1227年）にチンギス・カアンは天に上った。

ここで「*tenggeri-tür qar=ba* 天に上った」という表現は、チンギスの死を意味する表現としてのみ秘史において用いられている<sup>1</sup>。上記に引用した部分は、§ 268 の内容をまとめたものになっているが、当該節においてもチンギスの死因についての明確な叙述があるわけではない。当該節よりも3節遡る § 265 においてはチンギスが落馬して発熱したという叙述がある。それゆえ、落馬との関連が暗示されていると言え

なくもない。しかし、§265においては、チンギスはこの発熱にも関わらず、タングート（西夏）の丞相であるアシャガムブと戦いを交えて勝利を収めるなど果敢な戦闘活動を行ったことが叙述されている<sup>2</sup>。それゆえ、落馬がチンギスの健康状態に重大な影響を及ぼしたとしても、秘史の叙述に依拠する限り、死の原因を落馬に直接求めるのは難しいように思われる。

チンギスの死については史実としても様々な説があるが<sup>3</sup>、本論では秘史を“英雄叙事詩”とみなす観点から、この問題にアプローチしてみたい。

## 1. 本論の目的と議論の流れ

### 1. 1 本論の目的

本論においては、イエスイ妃とトルン・チェルビ（侍従）が、1）動機的にも、2）物理的にも、共謀して殺害に関わったということがありえたという仮説を提示することにした。次に、この仮説における動機については、“復讐”だけでなく、チンギスの暴走を制止して、チンギスの名誉を守るという“救済”という意味もあったことを指摘したい。本論の先行研究は、モンゴル英雄叙事詩に特徴的な構造を常に参照しつつ重ねられているが、モンゴル英雄叙事詩に特徴的な構造とは、明示的レベルの内容と非明示的レベルの内容が真逆あるいは正反対に対応するような構造のことを言う。秘史に関わるこれまでの拙論においても、筆者は秘史の内容における明示的レベルと非明示的レベルの内容が正反対に（シンメトリーに）対応していることを指摘してきた。それゆえ、秘史がモンゴル英雄叙事詩の一作品として扱われうることは異論の余地のない域に入ってきていると言えよう。

本論では、チンギスはタングートへの出征の際に、この遠征に連れて行ったイエスイ后と、トルン侍従の二人により暗殺されたという仮説を立て、この仮説の妥当性を検証することにした。イエスイは秘史で語られている正妻ボルテ以外に言及されているその他三人の妻の一人である（巻5 §155, 巻7 §197）。トルン侍従のほうは秘史でチンギスに任命された6人の侍従のうちの一人である（巻7 §191）。

### 1. 2 議論の流れ

1.1で述べた目的を遂行するため、本論では次のような流れで考察をおこなう。まず、1.3においては本論における対象文献、1.4では方法論に触れる。

続く2.においては、チンギスの死に言及される§268から遡って§268→§267→§266→§265という順で仮説の妥当性を検証する（ただし必要な場合には他の節からも引用している）。とくに、2.の全体の議論の中心は、イエスイとトルン侍従にチンギスを暗殺する動機と暗殺するために必要な物理的・空間的な可能性があったかどうかという二点に置かれている。2.の前半部分では彼らの動機について焦点を当て、具体的に言うと、2.2.1で復讐、2.3で救済という二つの動機があったことを論じる。これに関連して、2.2.2の議論においては、原文における主語の欠落や時系列に関わる副詞が、本論の仮説に基づくと、極めて意味深い形で用いられていることを指摘する。2.の後半部分は、イエスイとトルン侍従にチンギスを暗殺しうるための物理的・空間的な余地があったかどうかの議論となっている。彼らを暗殺者の最有力候補とするために、暗殺者となりうる二種類の有力候補が2.4と2.5で排除されているさまを提示する。

続く3.においては、チンギスの死に関連する叙述の最初の節となる§265に焦点を当てて、当該節の前半部分ではチンギス陣営に焦点を当てた考察、後半部分ではタングート陣営に焦点を当てた考察を行

う。3.1での論点はチンギスの老いというものであり、ここでは原文における老いに関連する箇所を考察する。3.2.では、タングートの内部の亀裂が示す非明示的内容を指摘し、この非明示的内容が本論の仮説と整合的に理解されうることを示す。4.においては本論の内容を要約した上で、本論で扱った § 265～§ 268 における明示的内容と非明示的内容を対比した表を示す。最後に、今後の課題として本論で積み残した課題に触れる。

### 1. 3 対象文献

四部叢刊本の続集二巻を含めた計十二巻を便宜上「ひとつの作品」とみなし、この総体を対象とする。秘史の編集過程においては多くの説があるが、現在のところ、敢えて連続体のものであるとして扱うということである。筆者の秘史研究においては、原文の音訳漢字をローマ字転写するさいには、四部叢刊本を定本として編まれた栗林均・确精扎布編『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』（2001年）に依拠している。訳語に関しては、小沢重男の『元朝秘史全訳』3巻と『元朝秘史全訳続攷』3巻（1984～1989年）及び岩波文庫の『元朝秘史』上下巻（1997年）を参照にする。

### 1. 4 方法論

本秘史研究は、秘史がどのような論理で構成されているかを考察するものであるが、テキスト読解の基本的な方法論は、フランスの構造・記号学者ロラン・バルト (Roland Barthes) が「物語の構造分析序説」で示した構造分析の枠組みに拠っている (ロラン・バルト 1979 [1977]: 1-54)<sup>4</sup>。

詳細にはここでは立ち入らないが、この方法論で注意すべき点は、これが歴史学における方法論とはかなり異質だという点である。なぜなら、歴史学においては言語を現実を生起した事象を「客観的に」記述しているとみるが、筆者の採っている言語観は構造主義的立場に立つものであるため、言語は現実の生活世界とは独立した、言語的構築物と見做されるからである<sup>5</sup>。言語的構築物というこの観点は、本論において論点となる幾つかの箇所で、重要な考え方を提供することになる。たとえば、本論で考察する次のような箇所、すなわち、続集巻二の § 267 におけるトルン侍従によるチンギスへの報告形式の叙述をどう解釈するかという場合である。具体的に言うと、トルン侍従はチンギスにタングート王の殺害を命じられるが、トルン侍従はこの命令後にチンギスのもとに行って命令どおりに殺害したと報告している。その叙述は「トルン侍従はブルカン王を殺したと言った」であって、「トルン侍従はブルカン王を殺した」とはなっていない。後述するように、この叙述にブルカン王の生存という非明示的内容を本論では想定することになるのである。

## 2. チンギスの死に関わる仮説

### 2.1 チンギスの死に言及される § 268 の叙述

本論においては、イエスイ妃とトルン侍従がチンギスの死に関与したのではないかという仮説を提示しようとするものであるが、このことを考えるために、まずはチンギスの死に言及されている § 268 の原文を確認してみることにしたい。§ 268 の全文を挙げると次のようになる (栗林均・确精扎布 2001: 568, 570)。

- ①12:12:03 Tangyut\_irgen-i dawuli=ju Iluqu\_Burqan-i Šidurqu  
 タングートの民を掠奪して、イルク・ブルカンをシドルグ（忠実）と
- ②12:12:04 bolqa=ju ima-yi büte'e=ju Tangyut\_ irgen-ü eke ečige-yi  
 なして、彼を終わらせて、タングートの民の父母たちを
- ③12:12:05 uruy-un uruq-a gür=tele muquli musquli-yi ügei bolqa=n  
 親族の親族に至るまで、徹底を…して（？）亡き者にして
- ④12:12:06 ‹‹ ide'e ide=qüi ja'ura muquli musquli ügei ke'e=n  
 「食事をしている間も徹底的に、と言って、
- ⑤12:12:07 ukü'ül=ü=n ečitke=n kelele=n a=tqun.›› ke'e=n jarliq  
 死なせ、終わりにするようにと話している」と勅を
- ⑥12:12:08 bol=ba. Tangyut\_irgen üge ugüle=ju üge-tür ülü  
 なした。タングートの民は言葉を言って、その言葉に
- ⑦12:12:09 gür=gü-yin tula Tangyut\_irgen-tür Činggis\_qahan  
 至らないがため、タングートの民にチンギス・カアンは
- ⑧12:12:10 nökö'ete ayala=ju Tangyut\_irgen-i muqutqa=ju  
 再び遠征して、タングートの民を殲滅して
- ⑨12:13:01 ire=ju qaqaı jil Činggis\_qahan tenggeri-tür qar=ba.  
 帰ってきて、亥の年にチンギス・カアンは天に上った。
- ⑩12:13:02 qar=u=qsan-u qoyina Yisüi\_qadun-a Tangyut\_irgen-eče  
 昇った後に、イエスイ妃にタングートの民から
- ⑪12:13:03 maši ök=be.  
 大いに与えた。

上記の § 268 内容を見ると、チンギスの死因については何も語られていないが、当該節のすぐ前の § 267 においては、チンギスがタングートのイルク・ブルカン（以下、ブルカン王と記す）と接見したさいの叙述を見ると、チンギスの健康状態はこの時点で芳しくなかったことが暗示されている。§ 267 の全文を挙げると次のようになる。

続集巻二 § 267

- ①12 : 09 : 05 Činggis\_qahan Časutu-ača gödöl=ju Uraqai\_balaqasu  
 チンギス・カアンが雪山から移動してウラカイ城に
- ②12 : 09 : 06 bawu=ju Uraqai\_balaqasun-ača gödöl=ju Dörmegei\_balaqasu

下営して、ウラカイ城から移動して、ドルメガイ城を

- ⑬12 : 09 : 07 ebde=n bü=qüi=tür Burqan Činggis\_qahan-na a’ulja=ra  
破壊しているときに、ブルカン（王）がチンギス・カアンに接見しに
- ⑭12 : 09 : 08 ire=be.tende Burqan a’ulja=run altan sümes  
やってきた。そこで、ブルカン（王）は接見のために複数の黄金の仏像<sup>6</sup>
- ⑮12 : 09 : 09 teri’üle=n altan mönggün ayaqa saba yisün yisüt nu’ut  
をはじめとして、金銀の器類を九×九ほど、少年
- ⑯12 : 09 : 10 ökit yisün yisüt aqtas teme’et yisün yisüt  
少女を九×九、去勢ラクダを九×九
- ⑰12 : 10 : 01 eldeb-iyer yisün yisüt jisüle=jü a’ulja=qui-tur  
様々なものを、九×九をうち揃えて接見したところ、
- ⑱12 : 10 : 02 Burqan-i e’üiten büte’üy-e a’ulja’ul=ba. tere a’ulja=qui\*  
ブルカンを戸の暗がりで接見させた。その接見する
- ⑲12 : 10 : 03 -tur Činggis\_qahan dotora dura bulqa=ba. quta’ar  
際に、チンギス・カアンは気分が悪くなった。三日目の
- ⑳12 : 10 : 04 üdür Činggis\_qahan jarliq bol=u=run Iluqu\_Burqan-a  
日に、チンギス・カアンは勅を下すときに、イルク・ブルカンに
- ㉑12 : 10 : 05 Šidurqu nere ök=čü Iluqu\_Burqan Šidurqu-yi  
シドゥルグ（忠実）という名前を与えて、イルク・ブルカンを
- ㉒12 : 10 : 06 irekde=jü tende Činggis\_qahan «Iluqu-yi nökcüye-tkün.»  
来させて、そこでチンギス・カアンは「イルクを去らせしめよ」
- ㉓12 : 10 : 07 ke’e=n «Tolun\_čerbi qarda=ju nökcü’e-tügei.» ke’e=n  
と言って、「トルン侍従が手をかけて去らしめよ」と言って
- ㉔12 : 10 : 08 jarliq bol=ba. tende Tolun\_čerbi «Iluqu-yi qarda=ju  
勅を下した。そこで、トルン侍従は「イルクに手をかけて、
- ㉕12 : 10 : 09 büte’e=be.» ke’e=n öči=esü Činggis\_qahan jarliq  
終わらせました」と言って奏上すると、チンギス・カアンは勅を
- ㉖12 : 10 : 10 bol=u=run «Tangyut\_irgen-tür üge olulča=n ayisu=qui-tur  
下して、「タンゲートの民のところに、話をつけようと近づいていくと
- ㉗12 : 11 : 01 ja’ura Arbuqa-yin qulat abala=asu ebed=ü=ksen mariya  
途中で、アルブカの野生のロバたちを狩っていると、負傷した肌を
- ㉘12 : 11 : 02 min-u ana=tuqai ke’e=n amin beye min-u qayirala=ju  
「癒すべきだ」と言って私の命と体とを労わって、
- ㉙12 : 11 : 03 üge duratqa=qsan Tolun büi je. nökör gü’ün-ü qoron  
言葉を述べたのはトルン侍従であるぞ。輩の毒
- ㉚12 : 11 : 04 üge-tür ire=jü möngke tenggeri-de gücü nemekde=jü  
言でやってきて、永久なる天に力を添えられて

- ⑫12:11:05 qar-dur-ıyan oro'ul=ju öš-ıyen ab=u-ai je bida. Iluqu-yin  
自らの手にかけて恨みを晴らしたのだぞ、我々は。イルク・ブルカンの
- ⑬12:11:06 ene ab=ču ire=ksen newü=gü qarşı ayaqa saba selte  
この略奪した移動式宮殿や器類を
- ⑭12:11:07 Tolun ab=tuqai. »ke'e=n jarliq bol=ba.  
トルンが取るように」と勅を下した。

チンギスの健康状態が芳しくなかったというのは、上記⑧の原文の斜体部と訳文の下線部において、チンギスがブルカンと接見する時に、「戸の暗がり」で接見したという箇所暗示されている。この表現の解釈には複数のものがあるが<sup>7</sup>、ここでは「戸の暗がり」というように解しておく。チンギスは、この接見中にも具合が悪くなつたらしい。それは、上記⑨の原文の斜体部と訳文の下線部の「気分が悪くなった」という箇所に暗示されている。そのようなわけで、彼がタングートのブルカン王と接見した三日後にブルカン王の殺害を命じているのは、三日間熟慮した結果というよりも、健康状態の悪化から三日間勅を下せなかったという可能性のほうが高い。

この可能性は、上記の⑭～⑮の箇所において次のような叙述が二つ観察されることから推測できる。その一つは、1.4で少し触れたように、ブルカン王を殺害したというトルンの報告だけで、チンギスは自分自身でそれを確認したという叙述がないことである。もう一つは、その代わりに、この報告を聞いた後にチンギスがトルンに褒賞を与えたという叙述があることである。この二つを合わせると、この時点でチンギスの容態が悪かったことはほぼ間違いないであろう。

## 2.2 復讐劇としてのイエスイ妃とトルン侍従によるチンギス暗殺という仮説

### 2.2.1 イエスイ妃とトルン侍従の動機

チンギスを暗殺した下手人として本論では、チンギスの妻イエスイ妃とトルン侍従の二人の結託によるものであるという仮説を提起するのであるが、こうした仮説を提示する理由はこの二人の出自と境遇にある。

まず、イエスイについてである。イエスイはタタル出身で、チンギスに前夫を殺されている(巻5 §156)。つまり、チンギスの暗殺に関わる動機としては、前夫の復讐ということがある。ただし、イエスイについてはすでに考察したことがあるので、ここでは割愛することにした(藤井 2010b)。

もう一方のトルン侍従については、秘史には固有名詞としての Tolun が 12:11:03, 12:11:07 の 2 回、Tolun-a という与位格の形式で 09:07:01 の 1 回、Tolun+tan-lu'a という共同格の形式で 09:10:04 の 1 回、官職名もついた Tolun\_čerbi という形で 07:18:07, 11:19:02, 12:02:03, 12:10:07, 12:10:08 の 5 回現れる(栗林均・确精扎布 2001:842)。Tolon を Tolun の異形と見做せば、08:25:03 の 1 回も数えることができる(同頁)。この最後の事例を入れると、トルン侍従は、巻7 §191、巻8 §202、巻9 §212 と §213、続集巻一 §253、そして本論の考察対象に入っている続集巻二 §265 と §267 である。トルンについての初出の §191 においてはトルンを含む 6 人の侍従がチンギスから任命されたという内容が記されている。§202 ではチンギスによって任命された 95 名の千戸長のうち 12

番目に記されている。

巻9 §212 においては、叙述内容がトルンのみ関わるものであることを考えると、トルンは秘史で重要視されていることがわかる。§212 においては、トルンがその父とは別個に千戸長になるように任命している<sup>8</sup>。続く §213 は、オングルやボロクルに焦点を当てた内容であり、彼らが食事を担当する官職に任命されている。トルンは、彼ら二人と共に、中央に北面して座るように指摘されている。§213 で重要なことは、トルンの座席が飲食を司る官職の者と同じ場所に座るように指定されていることである。このことは、後述するが、トルンがチンギスの暗殺、おそらくは毒殺に関与したことの伏線となっている。

続く続集巻一 §253 においては、トルンがチンギスの同母弟カサルに随行して北京城塞を下す戦いに参加したことに言及されており、トルンが金国との戦いに参加したことがわかる。具体的に戦闘に加わったかどうかは記されていないが、ジュルチェデイという有名な戦士と一緒に任命されているところから、トルンは非戦闘要員だったわけでもなさそうである。それゆえ、後続の §267 でトルンがチンギスからブルカン王の殺害を任命されていることは奇異なことではない。

この §253 以降でのトルンの再登場は、本論で焦点を当てる続集巻二 §265 となっている。本論の対象となる最初の節である §265 において登場するさいのトルンの言及のされ方は注目に値する。なぜなら、トルンの名前は「コンゴタンの」と修飾されているからである（後続の §265 の転写と邦訳の⑫の下線部を参照）。つまり、当該節までにトルンの登場は何度もあったにも関わらず、トルンの出自集団が当該節で初めて明かされている。このことは彼がチンギスを暗殺した下手人であったという仮説と符合している。なぜなら、秘史においてコンゴタンといえば、有名なシャマンであった、ムンリク・エチゲの7人の息子の一人であるデブ・テンゲリがすぐに想起されるからである。チンギスはこのシャマンを殺害させており（巻10 §245）、その後、コンゴタン一族の影響力が失われた旨のことが叙述されているので（同節）、トルン侍従はデブ・テンゲリの兄弟だったか、あるいは、コンゴタン一族の一人であったと見ることができる。単に後者のコンゴタン一族の一人だった場合にしても、デブ・テンゲリは一族の象徴的存在であったので、デブ・テンゲリの復讐であったという動機が見いだせるのである<sup>9</sup>。

以上のように、チンギスに復讐する動機は、イエスイとトルン侍従の両者に認められることを確認した。次の節においては、この仮説に基づく、理解可能になる叙述がいくつかあることを提示してみたい。

## 2.2.2 仮説を前提にすると理解可能になる諸叙述

2.2.1 では、チンギスはトルン侍従の報告だけを受けてトルン侍従に褒美を与えていることから、チンギスの健康状態がこの時点で既に芳しくなかったことを指摘した。トルン侍従がチンギスの死に関わっていたという仮説に基づくならば、トルン侍従がチンギスの勅命に従ったのかどうか曖昧に叙述されていることは、偶然ではない。重要なので繰り返すが、この叙述においては「ブルカン王を殺したと言った」とあり、「ブルカン王を殺した」とは叙述されていないからである。こうした曖昧な表現は、非明示的内容としてトルン侍従がチンギスを裏切ってブルカン王を殺害していなかったという解釈の余地

を与えているのである。

トルン侍従がブルカン王を殺害しなかったのであるなら、ブルカン王はチンギスの死後、生存していたことになる<sup>10</sup>。このことは重要である。なぜなら、チンギスが死去する前にブルカン王が殺されたのか否かということは、実は、§ 268 の末尾の文章の解釈に関わるからである。すなわち、§ 268 の末尾の文章とは、前述に引用した⑨～⑩の箇所「チンギス・カアンが天に昇った。昇った後に、イエスイ妃にタングートの民から大いに与えた (Činggis qahan tenggeri-tür qar=ba. qar=u=qsan-u qoyina Yisüi qadun-a Tangyut irgen-eče maši ök=be)」の箇所である。なぜなら、イエスイにタングートの民を大いに与えた主語は明示的には示されていないものの、この箇所を読むと、「天に昇った *tenggeri-tür qar=ba*」という動詞の主語は明示的に「チンギス・カアン Činggis qahan」であるため、次の文の「昇った後に *qar=u=qsan-u qoyina*」の文の主語は明示されていないものの、前文と同じ動詞「昇る *qar=*」が用いられているので、当該文の後半のタングートの民をイエスイに与えたのはチンギスだったと読むのが妥当な読み方である。しかし、ブルカン王がこの時点で生存していたとすると、チンギスの死後に民をイエスイに分け与えたのは、ブルカン王その人だった可能性が浮上してくるのである。その場合、ブルカン王がイエスイに自分の民を与えた理由は、タングートの民のせん滅を回避させてくれたイエスイに対する感謝の念であったと考えるのが妥当だろう。

ブルカン王の褒賞はイエスイにだけ与えられて、トルン侍従に与えられなかったように見えるが、既にチンギスはブルカン王から奪った宮殿や金銀の器をトルンに生前贈与していた(続集巻二 § 267)。それゆえ、チンギスの死の“前”ではなく、死の“後”にイエスイにタングートの民を贈られていることは、実はブルカン王がなした行為であることを非明示的に示していることになる。つまり、秘史の「作者」は主語を二通り解釈できるように、誰がイエスイにタングートの民を与えたのかという文の主語を意図的に伏せたのだと考えられる。おそらくは、明示的には“チンギス”と読ませることを意図したのである。

ところで、チンギスの死後にイエスイに民が分与されたという叙述はモンゴル人にとっても必ずしも自明ではないようで、この部分の叙述を問題視したモンゴルの碩学ダムディンスレンは「みまかる前にタングートの民から多くをイエスイ妃に与えた Халихын өмнө Тангуд иргэнээс маш олныг Есүй хатанд өгөв」というように、チンギスが死去する“前に”タングートの民をイエスイに分け与えたと校訂している(Дамдинсүрэн 1976 : 227)。斜線部の өмнө (emüne) は原文では хойно (qoyina) であり、ダムディンスレンの校訂について小沢は、「その気持ちはわからなくもないが、根拠が示されていない」と指摘している(小沢 1989 : 428)。ここで問題になっているのは、当該節の最後の文の主語がないために、“誰が”イエスイにタングートの民を与えたのかということが不明確であったのを、ダムディンスレンが明示的な内容から推測して補ったということになる。しかし、本論の仮説に基づくなら、この校訂は非明示的内容を消し去るので、原文のままが正しいということになる<sup>11</sup>。

ダムディンスレンの校訂はしかし、チンギスの死が近づいていた頃のチンギスとイエスイの関係性に関心を向けさせる点で興味深い。つまり、トルン侍従に褒賞として、タングートから略奪した移動式の宮殿 *newü-gü qarši* や器類 *ayaya saba selte* を与えという叙述を見ると、チンギスはイエスイに何も生前贈与していないことが判明するからである。これは偶然ではなく、当時、彼らの関係はかなり冷え込ん

だものとなっていた可能性を暗示しているように思われる。

とはいえ、チンギスが、トルン侍従に終始一貫して信頼を置いていたかといえば、それも疑わしい。なぜなら、トルン侍従はチンギスの健康を気遣うという形ではあるが、チンギスのタングートへの攻撃を延期するように進言しているからである（続集巻二 § 265）。そもそも、チンギスがトルン侍従にブルカン王を殺害するように命じたのは、彼の進言の真意に疑念を持っていたともいえるのではなかろうか。しかし、トルンがチンギスにブルカン王を殺害したと言うので、チンギスはトルン侍従に最終的に信頼を置いたのだと解釈しうる。つまり、褒賞がトルン侍従に与えられている直接的な理由は、トルン侍従がチンギスの命令に従ってブルカン王を殺害した—厳密に言うと、ブルカン王を殺害した“と言った”—という一点に求めうる（§ 267）。

上記の考察に基づくと、秘史には明示的に書かれていないが、イエスイはブルカン王の殺害に反対していたのではないかと推測される。その理由はおそらく、ブルカン王はチンギスに投降しに来ているため、彼を殺害するのは過剰な行為だからであろう。かつて、チンギス陣営に紛れ込んできた前夫に気が付いた彼女がため息をついたという優しさを想起すると（巻5 § 156）、不要な殺生をいさめた可能性はある。そして、彼女が優しさだけでなく、西域への軍事遠征に出かける前にチンギスに後継者を選出しておくようにという進言をしたという勇敢さも持ち合わせていたことを同時に思い出す必要がある（続集巻一 § 254）。後継者のことを考えよという進言はチンギスに自分が死ぬことを想定するように促すということである。

以上、トルン侍従がブルカン王を殺害しなかったということを前提にすると、先に引用した § 267 の⑨～⑮の箇所「三日目の日に、チンギス・カアンは勅を下すときに、イルク・ブルカンにシドゥルグ（忠実）という名前を与えて、イルク・ブルカンを来させて、そこでチンギス・カアンは『イルクを去らせしめよ』と言って、『トルン侍従が手をかけて去らしめよ』と言って勅を下した。そこで、トルン侍従は『イルクに手をかけて、終わらせました』と言って奏上すると」における斜体部分は明示的には「終わらせました」で良いが、非明示的には、「彼の意向を成就させた」という意味として解釈する必要がある。もしそうであれば、ブルカン王は、トルン侍従に自分を殺したとチンギスに奏上するようにという案を出した可能性さえある。そうであれば、ブルカン王がイエスイに自分の民を分け与えたことは理に適う。

以上、チンギスの死は、イエスイ妃とトルン侍従による復讐劇として読めることを提示した。上記の考察に基づくと、死の間際、チンギスは妻であるイエスイにも側近中の側近のトルンに対しても信用を置いていなかったことがうかがわれる。おそらく、彼らによるチンギスの暗殺の方法は毒殺で、хорьг хороор（毒をもって毒を制す）ということであろうと推測される。2.2.1 で触れたように、トルンは巻9 § 213において、飲食を司る官職の者と同じ場所に座るように指定されていることを考えると、§ 213はこの毒殺の可能性の伏線になっているということになる。

ところで、イエスイとトルンは上記のように個別に暗殺に関与していただけでなく、両者は密かに共謀していたと思われる。なぜなら、両者には上記に論じたようなチンギスへの復讐という動機が共有されているだけでなく、両者ともに1) 落馬したチンギスの身体を労わって、2) タングート征伐を延期させようとしていたという明示的に記されている行動の点でも一致しているからである（後続の § 265 の転写と訳を参照）。

### 2.3 救済劇としてのチンギス暗殺

2.2では、イエスイ妃やトルン侍従は復讐としてチンギスを暗殺したという解釈をしたが、彼らは敵であったとはいえ、その当時においてはチンギス陣営の人間となっていたわけなので、当然ながら複雑な感情もあったと考えるのが当然であろう。実際、この観点から見ると、彼らによるチンギス暗殺は、チンギスを“救済する”という意味もあったと考えられる。下記の議論においては、先に挙げた、§ 267と§ 268の原文とその訳文を適宜参照されたい。

“救済”という観点から考察する際に注意を促したいのは、チンギスが、病の進行とともに認知能力が落ちていったことが明示的に読み取れることである。認知能力の衰えについて言えば、チンギスがタングートの被征服民を、最終的に十把一絡げに扱って、彼らをせん滅するように命じている箇所を指摘しよう。具体的に言えば、§ 268の②と③に跨る斜体で強調してある *Tangyut irgen-ü eke ečige-yi uruy-un uruy-a güir=tele muquli musquli ügei bolqa=n* (タングートの民の父母たちを親族の親族に至るまで徹底を…して(?) 亡き者にして) という箇所である。この表現における *eke ečige* (父母) は、§ 267の⑤と⑥に跨る箇所において、タングートのブルカン王がチンギスに謁見する際に献上したなかの *nu'ud ökid yisün yisüd* (少年少女を九×九) の父母を指示したものだとして理解しよう。

タングートのブルカン王がチンギスに献上した少年少女たちは、モンゴル英雄叙事詩や民話においてしばしば見られる征服地の民を平和裡に引き入れるための方策についてのモチーフを想起させる。このモチーフとは、まず、勝者となった勇者が、被征服地の王にその地の子どもや家畜の仔畜を所望する。すると、子どもの親や仔畜の親畜が続々とその子どもや仔畜に付き従って敵陣へと自然に移動していく。つまり、このモチーフは、すべての民や家畜を強制的に従わせなくとも、動物の本能に訴えることによって、ほんの一部の民を手に入れるだけで、民や家畜のすべてを手に入れるという老獪な収奪方法なのである。

ブルカン王はこうした摂理を用いることによって殺生を避けようとしたのかもしれない。もしそうであれば、チンギスは§ 268でこのブルカン王の意図を無視して、せっかく子どもに付き従っていく親を殺害するように命じていることになる。チンギスは、親を殺害することを命じているだけではなく、その親の親類縁者すべてを殺害するように命じている。このことは、献上した子どもたちをも殺害することを示している。確かに、ブルカン王が献上したもののうち、⑤の *altan münggün ayaqa saba yisün yisüd* (金銀の器類) はトルン侍従に分け与えているのであるが、この子供たちを誰に与えたのかは明示的に叙述されていない。タングートの民について言及されている相続についての叙述は、当該§ 268における末尾の文における *Yisüi qadun-a Tangyut irgen-eče maši ök=be* (イエスイ妃にタングートの民から大いに与えた) における *irgen* (民) に対応すると思われる。このことから、イエスイ妃がチンギスに対して異を唱えたのは、ブルカン王の殺害もそうであるが、こうした子どもたちを殺害せよというチンギスの非情な命令であった可能性が浮上する。

そして、前述の②~③の「タングートの民の父母たちを親族の親族に至るまで徹底を…して(?) 亡き者にして」という表現に続いて、④~⑤の *ide'e ide=qüi ja'ura muquli musquli ügei ke'e=n ukü'ül=ü=n ečitke=n kelele=n a=tqun* (「食事をしている間も徹底的に、と言って、死なせ終わりにするようにと話して

いる)」とある。つまり、チンギスは戦闘時だけでなく休息時にも兵士たちにタングートの殲滅を考え続けるよう命じていたということである。すでにタングートはチンギスに投降していたことを考えると、チンギスの命令は明らかに過剰なものだと判断されてよいだろう。この命令を下した時点で、チンギスはタングートの民とブルカン王個人との識別ができなくなっていた観がある。

だが、ここで強調すべきことは、少なくともタングート征伐に出征した時点においては、チンギスはタングートの民における種々多様な人々を明確に識別していたことである。前述のように、ブルカン王の謁見の前の § 266 においてはボオルチュやムカリに“キタドの虯の人々”を分与しているし、その前節の § 265 の後半部分には、アシャガムブ軍を降した後、チンギスは次のような命令を下しているからである（後続の § 265 の転写と邦訳の④⑨～⑤②を参照）。

erekün omoqun erebin sayit Tangyudud-i kidu=ju eyimün teyimün Tangyudud-i çeri'üt gü'ün-e «bari= qsa'ar oluysa'ar ab=u=tqun ke'e=n jarliq bol=ba.(勇猛で男性的で優秀なタングート人を殺し、役立たずのタングート人たちを兵士たちに「捕らえたまま、得たままに取れ」と勅した)

上記の文章を見ると、チンギスは同じタングート人でも、その中には役に立つものとそうでないものが含まれていることを認識していたことが観察されるのである。つまり、このような判断ができていた § 265 とチンギスの死が叙述される § 268 におけるチンギスの判断状態とは明らかに異なっていることが見て取れる。

以上のことを考えると、イエスイ妃やトルン侍従はチンギス暗殺に関わったという非明示的内容は、復讐劇という側面もあるが、チンギスの暴走を制止し、それによってチンギスの名誉を守るという意味での救済劇であったとも解釈しうるのである。

ところで、トルン侍従はコンゴタン集団に属していたので、これを重視するならば、彼もまたシャマニズムの信仰をもっていたと考えられるが、イエスイ妃はむしろ仏教徒であった可能性があることを指摘しておきたい。たとえば、イエスイ妃はタングート征伐より以前のサルタウル討伐へ出征するさいに、生きとし生けるものには終わりがあるということに言及し、チンギスに後継者選びを進言していたことを想起する必要がある（続集巻一 § 254）。秘史の「作者」の仏教知識については不明であるが、少なくとも、イエスイ妃が人間の死というものを直視し、慈悲の心を持っていることは、彼女が仏教の教えに近い考え方を持っていたように思われるのである。この点を重視するならば、イエスイ妃がタングートのブルカン王の助命をチンギスに進言していたかは秘史に明示的には記されていないものの、イエスイとブルカン王には相通じるものがあつた可能性は否定できない。

以上の議論に基づくならば、хорыг хороор（毒をもって毒を制す）には、次のような側面もあることを指摘しておきたい。それは、хорыг хороор арилгах（毒をもって毒を清める）ということであり、最終的に毒を毒でもって清浄なものとしたということである。このように毒でもって毒を制し、清めた結果、チンギスは § 268 の⑨の斜体で強調した箇所 *tenggeri-tür qar=ba*（天に上った）ということになる。ただしこの *tenggeri-tür qar=ba* における *tenggeri*（天）が *möngke tenggeri*（永遠なる天）と同一の概

念であるのかどうかは不明である。少なくとも、チンギス自身の信仰は、*möngke tenggeri*（永遠なる天）であり、このすぐ前の節である § 267 においても、この“永久なる天”という語がチンギスの発話の中に1回 (20)、後続で取り上げることになる § 265 においても2回現れている (30, 44~45)。“永久なる天”は仏教の天とは異なる概念であるとはいえ、秘史において“永久なる天”と“天”が実際にどのように使い分けられているかについては詳細に検討する必要がある。本論では、とりあえず、「地獄に落ちる」の逆の意味として「天上に上った」と解釈しておく。

以上、イエスイとトルン侍従がチンギスを暗殺したという仮説に沿って、その動機を論じてみたが、両者には十分な動機があることが判明したといえる。次の節においては、この仮説を補強する論を二つしておきたい。それは、一つには、上記で論じたように、トルン侍従がブルカン王を殺害しなかったのであれば、また、イエスイの信条がブルカン王に通じるものであったとすれば、当然ながらタングート王のブルカン王も有力な暗殺候補者のリストに挙がるはずである。もう一つは、チンギスの暗殺者の有力候補としてチンギスの部隊にいた *Jüyin irgen* (乳の人々) がいる。しかし、両者による暗殺の可能性は否定されることになる。以下においては、これについて詳しく論じたい。

## 2.4 ブルカン王が暗殺者の候補から外れることについて

イエスイがタングートの民を皆殺しにするように命じたチンギスの命令に反対し、トルンがブルカン王を殺していなかったとすると、チンギスを暗殺した候補者として、ブルカン王も浮上してくることになる。それゆえ、ブルカン王について言及される § 267 を詳しく考察することにしたい。当該節の内容については前掲の箇所を参照されたい。

§ 267 で注目すべきことは、チンギスがブルカン王との謁見の最中に、「気分が悪くなった」と叙述されていることである（前述の § 267 の転写と邦訳の⑨を参照）。明示的には、ブルカン王が、何らかの神通力でも用いたかのような雰囲気で記されている。しかし、この叙述はブルカン王に疑念が向くように意図されているように思われる。ブルカン王に注意が向けられている間に、イエスイやトルン侍従はこっそりとチンギスの飲み物などに毒を盛ることもできたかもしれないからである。しかし、その可能性は排除できるように思われる。なぜなら、もしこの時にイエスイとトルンが毒を盛ったとするならば、チンギスの暴走を制止するために暗殺したという説と齟齬が生じるからである。この時点で、チンギスの認知力に翳りはなかったからである。

ここで注目すべきは、ブルカン王が謁見した場所についての叙述である。§ 267 の⑧の「戸口の暗がり」というのは曖昧な表現であるが、問題の所在は、チンギスの傍に物理的に近づけたかどうかという点にあるように思われる。つまり、チンギスの暗殺者を同定する場合、動機的に可能であったとしても、物理的に不可能であれば、下手人の候補からはずれることになるのである。この点、チンギスとブルカン王の謁見の場所の叙述を見る限り、ブルカン王がチンギスに物理的に接近できたとは思われない。彼らの間には物理的に相当の距離があったと考えるべきである。

ブルカン王が普通の一超能力を持たない一人間であったのであれば、彼がチンギスの気分を悪くさせたことがあるとすれば (§ 267 の⑨の箇所)、言葉によるもの以外にはありえなかったはずである。おそらく、秘史には明示的に示されていないが、ブルカン (仏) 王という名前である仏教徒たるタングート王が言いそうなこととは、チンギスにこれ以上の殺戮をやめるようにということ以外にはないように思わ

れる。そして、このことが秘史に叙述されなかったのも、もしそのことが叙述されていれば、チンギスをあたかも殺人鬼のごとく非難することになるので、明示的に隠蔽されたのは当然だろう。

以上のように、この § 267 におけるチンギスとブルカン王の接見の描写に基づくと、ブルカン王は暗殺者の候補者リストから外れることになる。これに関連して次のことが指摘されるべきである。それは、ブルカン王が接見する時点においては、外部者はどのような高い身分の者でもチンギスと対面して会うことができなかつたと想定されることである。つまり、チンギスを暗殺できたとすれば、内部の者に限られるということである。むろんこの場合、下手人としてイエスイやトルン侍従が暗示されることになる。

改めて秘史の叙述に基づくならば、当時、チンギスその人に物理的に近づける人間はイエスイとトルン侍従に限られていたことは重要である<sup>12</sup>。この点で、§ 265 においてチンギスが狩猟で落馬したあとに泊まるチョオルガトにおいて、「チョオルガトに下営した。その夜、泊まると、翌朝に、イエスイ妃が言うには、『息子たち、長官たちよ、話し合ってください。カアンは夜、肌が熱いままで過ごされました』と言った」と記されていることは注目しうる（後続の § 265 の転写と訳文の⑨～⑩の箇所を参照）。

この箇所で重要なことは、イエスイが“夜に”発熱していたチンギスの状態をチンギスの息子や長官たちに“翌朝”知らせたと書かれていることである。そして、このイエスイ妃の言葉に賛同して、会合が開かれたことが記されている（3.の § 265 の転写と訳文の⑪～⑫の箇所を参照）。そして、関係者が集まった時にまず口火を切ったのが、“コンゴタン集団の”トルン侍従であったことが記され、トルン侍従がタングート征伐の延期を持ちかけたところ、息子たちや長官たちも賛同した旨が記されている（3.の § 265 の⑬～⑭の箇所を参照）。この箇所はチンギスの内部者の実態をよく示している。すなわち、イエスイ后がチンギスの近親者中の第一の近親者であり、トルン侍従が側近中の側近で、タングート征伐の延期をチンギスの息子たちや長官に“最初に”進言しているのである。

以上のように、イエスイとトルン侍従がタングート征伐の折に、チンギスに物理的に最も近くにいた人間たちであり、物理的にチンギスを暗殺することが可能だったといえるのである。

## 2.5 Jüyin\_irgen（虬の人々）が暗殺者の候補から外れることについて

物理的に可能であったかどうかという観点から、次に、チンギスの暗殺者候補として Jüyin\_irgen（虬の人々）もまた秘史で排除していることについて指摘しておきたい。上記の § 267 より一つ手前の § 266 を見てほしい。チンギスは § 266 においてボオルチとムカリにキタドの Jüyin\_irgen（虬の人々）を恩賞として等分に分け与えている。この恩賞は唐突の観がある<sup>13</sup>。この恩賞についての叙述が挿入されたのは、チンギスを暗殺した候補者から Jüyin\_irgen（虬の人々）を排除する狙いがあったからだと考えられる<sup>14</sup>。この Jüyin\_irgen（虬の人々）を本論では“外国人傭兵部隊”のことを指していると解釈する<sup>15</sup>。考察に入る前に、§ 266 の全文のローマ字転写と訳文を示しておく。

### 続集巻二 § 266

①12 : 07 : 05 Činggis\_qahan Časutu de'ere jusa=ju Aša Gambu-lü'e

チンギス・カアンはチャスト（雪のある場所）で夏を過ごし、アシャガムブと

- ②12 : 07 : 06 a'ulala=qsat dayyiji=qsat terme gerten teme'en  
山にこもり、敵対した、帳ある家、駱駝の
- ③12 : 07 : 07 ači'atan Tangyudud-i čeri'üt ilē-jü ono=qa'ar  
荷を持つタンゲートたちを、軍隊を遣わして急所を狙って
- ④12 : 07 : 08 ülit=tele tala'ul=bai tende-če Bo'orču Muqali  
絶滅するまで掠奪させた。そこから、ボオルチ、ムカリの
- ⑤12 : 07 : 09 qoyar-a soyurqa=run <<güčün-e mede=tele ab=tuqai. >>ke'e=n  
二人に恩賞を与えるさいに、「自分が支配できる限り取るように」と
- ⑥12 : 07 : 10 jarliq bol=ba. basa Činggis\_qahan jarliq bol=u=run  
命じた。また、チンギス・カアンが命じるには、
- ⑦12 : 08 : 01 Bo'orču Muqali qoyar-a soyurqal ög=ü=rün <<Kitat\*  
ボオルチとムカリの二人に、恩賞を与えるさいに、「キタドの
- ⑧12 : 08 : 02 \_irgen-eče ese ög=ü=le'e. >>ke'e=n <<Kitat\_irgen-ü Jüyin-i  
民から与えなかったな」と言つて、「キタド人の虜を
- ⑨12 : 08 : 03 ta qoyar sača'u qubiyaldu=ju ab=u=tqun. sayit  
二人で等分に分け合つて取るように。すぐれた
- ⑩12 : 08 : 04 kö'üd-i an-u šibawu-ban bari'ul=ju daqa'ul=ju yabu=tqun  
男の子に自分の鳥を捕まえさせて従え行くように
- ⑪12 : 08 : 05 sayit ökid-i an-u ösge=jü emes-iyen qormai  
すぐれた娘たちに育てさせ、自分の（服の）裾を
- ⑫12 : 08 : 06 jasa'ul=u=tqun. Kitat\_irgen-ü Altan\_qan-nu itegelten  
縫わせておくように。キタドの民のアルタン・カンが信用している
- ⑬12 : 08 : 07 ina'ut Mongqol-un ebüges ečiges-i bara=qsan  
寵臣たちは、モンゴルの祖先たちを屠つた
- ⑭12 : 08 : 08 Qara\_Kitat Jüyin\_irgen a=ju'ui je. edö'e min-u  
カラ・キタド虜の人々であるぞ。いま、私の
- ⑮12 : 08 : 09 itegelten ina'ut Bo'orču Muqali ta qoyar büy=yü je. >>]  
腹心の寵臣はボオルチとムカリそなたたち二人であるぞ。」
- ⑯12 : 08 : 10 ke'e=n jarliq bol=ba.  
と勅した。

前述したように、Jüyin\_irgen (虜の人々) を本論では“外国人傭兵部隊”のことを指すと解釈したとしても、秘史においてこの語と連動する語との組み合わせの妙で、“外国人傭兵部隊”とは言っても、どのような集団を指すのかは複雑な問題となっている。それゆえ、まずは上記の § 266 で Jüyin\_irgen (虜の人々) がどのような表現で出現しているのかを確認しておく。そうすると、当該節では Jüyin という語は 2 カ所に現れていることが確認される。ひとつは⑧の Kitad\_irgen-ü Jüyin (キタド人の虜)、もう一つは⑭の Qara\_Kitad Jüyin\_irgen (カラ・キタド虜の人々) である<sup>16</sup>。両者の表現における Kitad と Kitat は同一の単語を表すものと考え、いったいどのような人々を指しているのだろうか。これを考える場合、2 つ目の⑭の Qara\_Kitad Jüyin\_irgen を含む文章すなわち⑫～⑭における Kitad\_irgen-ü Altan\_qan-nu itegelten ina'ut Mongqol-un ebüges ečiges-i bara-qsan Qara\_Kitad Jüyin\_irgen a=ju'ui je (キタドの民のアルタン・カンが信用している寵臣たちは、モンゴルの祖先たちを屠ったカラ・キタド虜の人々であるぞ) がヒントを与えてくれる<sup>17</sup>。なぜなら、ここでチンギスが“モンゴルの祖先たち”という表現で示唆しているのは、秘史の巻 1 § 53 におけるアムバガイ・カアンが“Tatar-un Jüyin\_irgen (タタルの虜の人々)”によって金朝に送られ、金朝の皇帝に処刑された話だと考えられるからである。アムバガイ・カアンは、タタル集団の下位集団のひとつと婚姻関係を結ぶために娘を見送りに行った途上で、“Tatar-un Jüyin\_irgen (タタルの虜の人々)”に捕らえられ、そのまま金に送られたのである<sup>18</sup>。この話に基づけば、当該節の⑭の Qara\_Kitad Jüyin\_irgen (カラ・キタド虜の人々) は、論理的に、この Tatar-un Jüyin\_irgen (タタルの虜の人々) と同一の集団を表しているはずである<sup>19</sup>。

非明示的な観点から見ると、ここで、Tatar-un Jüyin\_irgen (タタルの虜の人々) という表現ではなく、Qara\_Kitad Jüyin\_irgen (カラ・キタド虜の人々) という表現がされていることには意味がある。なぜなら、イエスイ妃がチンギスの暗殺に加担したという仮説に基づく、イエスイ妃はタタル出身者であるので、このタタルという表現が敢えて回避されていると考えられるからである。

ただし、§ 266 の虜の人々として重要なのは、ボオルチとムカリに等しく分け与えたほうの、一つ目の⑧における Kitad\_irgen-ü Jüyin (キタド人の虜) のほうの事例である。なぜなら、彼らがチンギスの身辺から遠ざけられたということが重要だと思われるからである。チンギスは、明示的にこれらの危険分子を腹心のボオルチやムカリに分与することで身の安全を図ったということであり、非明示的には、Jüyin\_irgen (虜の人々) はチンギスを殺害した下手人の候補者リストから外れるということの意味するのである。問題は、Kitad\_irgen-ü Jüyin (キタド人の虜) とはどんな集団なのかということである。

まずは、Kitad\_irgen-ü Jüyin (キタド人の虜) という表現における Kitad (キタド) とは何を指すのだろうか。傍訳においては“契丹”とある。だが、これを傍訳どおりに理解することは難しいように思われる。この事情を述べると以下のようになる。当該節には Qara\_Kitad の Kitat とは別に、単独で Kitad 或いは Kitat という語が登場しており、それらは⑦～⑧の Kitat\_irgen、⑧の Kitad\_irgen、そして⑫の Kitat\_irgen である。ただし、Kitad と Kitat は同じものを指す異形態と理解しておく。これら 3 カ所の傍訳はすべて“契丹”となっている。しかし、この Kitad/Kitat は“契丹”ではなく、実質として“女真”を指していると思われる。なぜなら、上記の 3 つ目の事例を含む箇所である⑫～⑭における Kitad\_irgen-ü Altan\_qan-nu itegelten ina'ut Mongqol-un ebüges ečiges-i bara-qsan Qara\_Kitad Jüyin\_irgen a=ju'ui je (キタドの

民のアルタン・カンが信用している寵臣たちは、モンゴルの祖先たちを屠ったカラ・キタド胤の人々であるぞ) が示している。この文章における Altan\_qan (アルタン・カン) とは金の皇帝を指しているからである。つまり、チンギスはこの箇所、金朝皇帝の信頼しているのは外国人傭兵部隊である“カラ・キタド胤の人々”すなわち上記の議論で明らかにした“タタルの胤の人々”であるが、自分の信頼するのは外国人傭兵部隊ではなくモンゴル人のボオルチャムカリなのだと言っているのである(明示的内容として)。

以上の考察に基づくなら、チンギスがボオルチャムカリに分け与えて自分の身边から遠ざけた Kitad\_irgen-ü Jüyin (キタド人の胤) とは、チンギスが対金国戦で捕虜にして傭兵部隊に仕立て上げた人々のことを指している可能性が高い。非明示的内容としては、チンギスはこうした人々を危険視して、ボオルチャムカリの管理下に委譲したということになる。

非明示的内容の観点から見て、当該節で“タタルの胤の人々”という表現が避けられて“カラ・キタド胤の人々”となっていることは重要であるが、もう一つ重要なことがある。それは、アムバガイ・カンだけでなく、チンギスの父イエスゲイもタタル集団によって毒殺されたという内容が巻1 §67~68にあるので、秘史の「作者」はこのタタル集団についても考慮しなければならないはずなのに、§266においてはタタル集団については一切記されていないのである。チンギスにとってアムバガイよりもはるかに重要な近親者は父であるイエスゲイなはずである。本論で提起している仮説では、チンギスの下手人の一人がタタル出身のイエスイであることを考えれば、イエスゲイのタタル集団による毒殺に触れていないのはなおさら不思議なことであると言える。これに連動して指摘すべきことは、トルン侍従については彼の出身集団が“コンゴタン”であることが明示されているにも関わらず、イエスイの出身集団が“タタル”であることは、本論の考察範囲となる §265~ §268 で一切触れられていないことである。このことは、イエスイ妃がチンギスの暗殺者だという可能性をむしろ示している。とくに、イエスゲイ毒殺事件が漏れていることは、秘史の「作者」による単なるミスとは到底考えられない<sup>20</sup>。いずれの場合も、“タタル”という存在が隠蔽されており、このことはタタル出身のイエスイ妃がチンギスの暗殺に加担したという仮説と符合している。

以上の考察の補足として述べておきたいのは、次のような事柄である。§266の当該節の Jüyin\_irgen (胤の人々) の考察には上記のように、Qara\_Kitat や Kitad/Kitat (の) の解釈が絡んでいたが、当該節の傍訳においては Kitad/Kitat (キタド) のほうの傍訳は“契丹”とあり、Qara\_Kitat のほうの傍訳は“種名”とだけある。とはいえ、実は、秘史の Qara\_Kitat のほうは、これも Qara\_Kitat の異形態である Qara\_Kitat という形態で、巻8 §198 や続集巻一の §247 において登場しているが、その傍訳は当該節のような“種名”ではなく、当該節で単独に現れている Kitad/Kitat (キタド) の傍訳と同じ“契丹”となっているのである。

ちなみに、Qara\_Kitat/Qara\_Kitad は秘史には8回現れるが(栗林均・碓精扎布 2001: 797)、そのうちの2回のみ“契丹”(続集巻一の §247, 続集巻一の §248)<sup>21</sup>、その他は“種名”あるいは“種”という傍訳になっており(巻5の §151, 巻5の §152 に2例, 巻6の §177, 巻8の §198)<sup>22</sup>、圧倒的に“種名”や“種”が多い。とはいえ、傍訳に“契丹”となっている事例が2回も登場しているので、これは偶然ではないと考えるべきである。Qara\_Kitat/Qara\_Kitad (カラ・キタド) の傍訳が“契丹”とな

っているこの2つの箇所においては、“Qara\_Kitad-un Jürčed-ün Jüyin (カラ・キタドの女真の虜)” という表現の中で現れている。傍訳の“契丹”を入れると、この表現は“契丹の女真の虜”ということになる。この表現の真意についてはさらに Kitad/Kitat の用例をすべて含めた上で詳細に検討する必要があるが、ここではこれ以上は立ち入らないことにする。少なくとも指摘できることは秘史においては Qara\_Kitat/Qara\_Kitad (カラ・キタド) と Kitad/Kitat (キタド) の問題はかなり複雑なものになっているということである。

2. の議論全体を振り返ると、1) チンギスの暗殺に関わったトルン侍従とイエスイ妃には動機的にも物理的にもチンギスの暗殺に関与しえたということ、2) チンギスの下手人としてブルカン王や Jüyin\_irgen (虜の人々) といった人々を物理的な観点から排除していることの二つの点が明らかになったといえる。すなわち、チンギスの側近中の側近であったイエスイ妃とトルン侍従を下手人とする仮説は信憑性があることが判明したと言える。ただし、彼らの暗殺は“復讐”という側面だけでなく、チンギスの名誉を守ろうとする“救済”という側面があったことを強調しておく必要がある。死期の近づいたチンギスの認知能力は著しく低下しており、妥当な政治的判断が下せなくなっていたからである。

ところで、この2の議論においてはチンギスの死のテーマの起点となっている § 265 については本格的に論じてはいなかった。それゆえ、次節の3.においては § 265 を詳細に考察することにしたい。

### 3. § 265 における明示的内容と非明示的内容の検討

まず、§ 265 の全文を、原文のローマ字転写と日本語訳で示しておく。

続集巻二 § 265

- ①12 : 01 : 02 tere übüü übülje=ju Tangyut\_irgen-tür morila=ya  
その冬を冬營地で過ごし、タングートの民に出馬しよう
- ②12 : 01 : 03 ke'e=n šini to'a to'ala=ju noqai jil namur  
と、新たな (新たに) 数を数えて、狗の年の秋に
- ③12 : 01 : 04 Činggis\_qahan Tangyut\_irgen-tür morila=bai.  
チンギス・カアンはタングートの民のもとに出馬した。
- ④12 : 01 : 05 qadu[n]d-ača Yisüi\_qadun-ni ab-ču ot=ba. ja'ura übüü  
妃たちからイエスイを連れて行った。途中、冬に
- ⑤12 : 01 : 06 Arbuqa-yin olon qulad-i abala=asu Činggis\_qahan  
アルブカ (地名) の多くの野生の騾馬を狩ると、チンギス・カアンは
- ⑥12 : 01 : 07 Josotu\_boro-yi unu=ju bü=le'e. qulat da'ari=ju  
ジョソト・ボロ (馬名) に乗っていた。野生の騾馬に近づくと、
- ⑦12 : 01 : 08 ire=esü Josotu\_boro ürgü=ju Činggis\_qahan-ni  
ジョソト・ボロは驚いて、チンギス・カアンを
- ⑧12 : 01 : 09 morin-ača una=asu mariya-ban maši ebet-čüü  
馬から振り落とすと、肌をかなり痛めて

- ⑨12 : 01 : 10 Čo'orqat bawu=bai. tere söni qono=asu manaqar  
 チョオルガトに下営した。その夜、泊まると、翌朝に
- ⑩12 : 02 : 01 Yisüi\_qadun ügüle=rün «kö'üt noyat keleleldü=tkün.  
 イェスイ妃が言うには、「息子たち、長官たちよ、話し合ってください。」
- ⑪12 : 02 : 02 qahan söni mariya qala'un qono=ba. »ke'e=bei. tende  
 カアンは夜、肌が熱いまままで過ごされました」と言った。そこで
- ⑫12 : 02 : 03 kö'üt noyat qura=asu Qongqotadai Tolun\_čerbi  
 息子たちや長官たちが集まると、コンゴタンのトルン侍従が
- ⑬12 : 02 : 04 duratqa=n ügüle=rün «Tangyut\_irgen nödü=ksen balaqasutan  
 提言して言うには、「タングートの民は築いた城壁を持ち、
- ⑭12 : 02 : 05 nunji nuntuqan büi. nödü=ksen balaqasu-ban ü'ür=čü ülü  
 移動できない住居を持っている者たちである。築いた城壁を担いで
- ⑮12 : 02 : 06 ot=qun tede. nunji nuntug-iyen gē=jü ülü ot=qun tede.  
 行くことが彼らにできようか。移動できない住居を捨てて行くことができようか。
- ⑯12 : 02 : 07 bida iču=ju qahan-u mara'a seri'üd=ü=esü basa  
 我々は退いて、カアンの肌の熱さが引いたら、また
- ⑰12 : 02 : 08 jiči morila=t je bida. »ke'e=esü bürin kö'üt noyat  
 出馬するのだ、我々は」と言えば、すべての息子たちや長官たちは
- ⑱12 : 02 : 09 ene üge jöbšiyе=jü Činggis\_qahan-na öči=esü  
 この言葉を是として、チンギス・カアンのところに行けば、
- ⑲12 : 02 : 10 Činggis\_qahan ügüle=rün «Tangyut\_irgen bidan-i jürüge  
 チンギス・カアンが言うには、「タングートの民は我々のことを心
- ⑳12 : 03 : 01 yada=ju qari=bai ke'e=kün bida elčın maqa ilē=jü  
 臆して帰ったと言うだろう。我々は使者を出して
- ㉑12 : 03 : 02 elčın-i mün ene Čo'orqat-ta sobila=ju üge an-u  
 使者を（？）まさしくこのチョオルガトで療養して<sup>23</sup>、彼らの言葉を
- ㉒12 : 03 : 03 uqa=ju iču=asu bol=u je. »ke'e=jü tende elčın-e  
 推し量ったうえで退けばいいだろう」と言って、使者に
- ㉓12 : 03 : 04 da'u bari'ul=ju ilē=rün «nidoni Burqan či ügüle=rün  
 言葉をそのまま伝えさせて遣るさいに、「去年、ブルカンお前は言うには、
- ㉔12 : 03 : 05 «ba Tangyut\_irgen bara'un qar čin-u bol=su. »ke'e=lü'e.  
 「我々タングートの民は、あなたの右手になろう」と言った。
- ㉕12 : 03 : 06 čima-da teyin ke'ekde=jü Sarta'ul\_irgen-e  
 お前にそのように言われて、サルタウルの民のところ
- ㉖12 : 03 : 07 eye-dür-iyen ese oroqda=ju morila=su ke'e=n  
 和議に入ることなく出馬しようと言って、(お前たちのところに)
- ㉗12 : 03 : 08 quyu=ju ilē=esü či Burqan üge-dür-iyen ülü gür=ü=n

頼みに（人を）遣わしたら、ブルカンは自分の言った言葉を破って

- ⑳12 : 03 : 09 čerik ba ülü ög-ü=n üge-er da'ari-ju ire-ju  
兵士も与えず、言葉でそしって、やってきた
- ㉑12 : 03 : 10 bü=le'e. ö'ere jori=qsan-tur qoyina olulča=su ke'e=n  
のだ。（その時は）他（の地）を目指していたので、後でことをはっきりさせようと
- ㉒12 : 04 : 01 Sarta'ul\_irgen-tür morila=ju möngke tenggeri-de  
サルタウルの民のところに出馬して、永久なる天に
- ㉓12 : 04 : 02 ihe'ekde=ju Sarta'ul\_irgen-i jük-tür oro'ul=ju  
加護されて、サルタウルの民を支配下に入れて、
- ㉔12 : 04 : 03 edö'e Burqan-tur üge olulča=su ke'e=n ayis=ai. 》  
今、ブルカンのところにことをはっきりさせようとやって来た」
- ㉕12 : 04 : 04 ke'e=ju ilē-esü Burqan ügüle-rün «da'aringqu üge  
と言って遣わせば、ブルカンは言うには、「そしるような言葉を
- ㉖12 : 04 : 05 bi ese ügüle-lü'e. 》ke'e=ju'üi. Aša\_Gambu ügüle-rün  
私は言わなかった」と言った。アシャガムブが言うには、
- ㉗12 : 04 : 06 «da'aringqu üges bi ügüle-lü'e. edö'e ber  
「そしるような言葉は私が言った。今で
- ㉘12 : 04 : 07 bö-esü ta Mongqol qatquldu'a sur-ču qatquldu=su  
あっても、お前たちモンゴルが合戦しよう
- ㉙12 : 04 : 08 ke'e-esü bi bü-rün Alašai nuntuqtu terme gertü  
たとえば、私はアラシャイの住居を持ち、帳の家を持ち、
- ㉚12 : 04 : 09 teme'en ači'atu büy-yü. Alašai jori=ju na-dur ire=tkün.  
駱駝の荷を持っている。アラシャイを目指して、私のところに来い。
- ㉛12 : 04 : 10 tende qatquldu=ya. altan mönggün a'urasun tabar  
そこで合戦しよう。金銀、絹布、財物が
- ㉜12 : 05 : 01 kerektü bö-esü Eri\_qaya Eri\_je'ü-yi jori=tqun. 》  
必要であるなら、エリ・カヤ、エリ・ジュウを目指せ」
- ㉝12 : 05 : 02 ke'e=ju ilē=ju'üi. ene üge-yi Činggis\_qahan-na gürge-esü  
と言って遣わした。この言葉をチンギス・カアンに届けると、
- ㉞12 : 05 : 03 Činggis\_qahan mariya qala'un a=run ügüle-rün « je teli  
チンギス・カアンは肌が熱い状態で言うには、「さて、それか。
- ㉟12 : 05 : 04 eyimü yeke üge ügüle'ül=ju ker içuqda=qui.  
このような大言壮語を吐かせて、どうやって退却できようか。
- ㊱12 : 05 : 05 ukü=rün yeke üge-tür šıqa=n yabu=ya. 》 ke'e=ju «möngke  
死ぬときが、その言葉に近づくときだ」と言って<sup>24</sup>、「永久なる
- ㊲12 : 05 : 06 tenggeri či mede=. 》 ke'e=n Činggis\_qahan Alašai jori=ju  
天よ、汝が知れ」とチンギス・カアンがアラシャイを目指して

- ④⑥12 : 05 : 07    *gür=čü Aša\_Gambu-lü'e qatquldu=ju Aša\_Gambu-yi daru=ju*  
到着し、アシャガムブと合戦し、アシャガムブを制圧し、
- ④⑦12 : 05 : 08    *Alašai de'ere qorqola'ul=ju Aša\_Gambu-yi ab=ču*  
アラシャイで要塞を築かせて、アシャガムブを捕らえて
- ④⑧12 : 05 : 09    *terme gertü teme'en aci'atu irgen-i in-u*  
帳のある家を持ち、駱駝の荷を持つ民を
- ④⑨12 : 05 : 10    *hünesü-er keyis=tele tala'ul=bai. erekün omoqun*  
灰で吹き飛ばすまで掠奪させた。勇猛で
- ⑤⑩12 : 06 : 01    *erebin sayit Tangyudud-i kidu=ju eyimün teyimün Tangyudud-i*  
男性的で優秀なタングート人を殺し、役立たずのタングート人を
- ⑤⑪12 : 06 : 02    *čeri'üt gü'ün-e < bari=qa'ar ol=u=qa'ar ab=u=tqun. >*  
兵士たちに「捕らえたまま、得たままに取れ」
- ⑤⑫12 : 06 : 03    *ke'e=n jarliq bol=ba.*  
と勅した。

以上の § 265 は前半と後半に大きく分かれていると言える。前半部分は①～③まで、後半は③から最後の⑫までである。前半ではタングート征伐にやってきたものの、チンギスの不慮の落馬事故により、チンギス陣営の中で、トルン侍従による出馬延期の進言が出されている。そしてこの延期の進言を受けて、チンギスがタングートの出方を見ようとタングートに使者を出して、サルタウル戦に兵を出さなかっただけでなく、チンギスへの無礼な発言をしたブルカン王を非難させる。ただし、上記の⑪の箇所を小沢は「使者が（帰ってくるまで）このチョオルガトで療養して」と *iretele*（帰ってくるまで）という語を補って解釈しており（小沢 1989 : 397-398）、本論でも明示的には小沢の解釈を取っておくものの、秘史で欠落している箇所は深い意味があることを § 268 の末尾の文章におけるダムディンスレンの解釈への反論で示したので（2.2.2 参照）、これについてはさらなる詳細な考察が必要かもしれない。ここまでが前半の内容である。後半では、タングートにおけるブルカン王とアシャガムブのやりとりで、かつてチンギスへ無礼な発言をしたのがブルカン王ではなく、アシャガムブであったことが記されている。それだけでなく、アシャガムブはさらにチンギスを挑発する言葉を発したことでチンギスを激怒させ、その結果、チンギスがタングートに出馬し制圧したことが記されている。

### 3.1 続集巻二 § 265 の前半部分における非明示的内容－チンギスの“老い”－

まず、当該節の前半部分における叙述は、明示的に示されているような単なる出来事の叙述ではなく、非明示的にチンギスの“老い”という状況を示していることに注意を促したい。生老病死という観点から見ると、当該節はその後の節の病と死に先立つ、老いを叙述した箇所としての意味を改めて帯び始めることになる。チンギスはこの節以降、“生老病死”という人生ステージの老病死という三つのステージを一気に駆け抜けていくことになる。

このことを論じる際に、§ 265 における冒頭の①～③の *tere übül übülje=ju Tangyut\_irgen-tür morila=ya*

ke'e-n *šini to'a to'ula=ju* noqai jil namur Činggis\_qahan Tangγut\_irgen--tür morila-bai に焦点を当てる必要がある。とくに、斜体箇所<sup>②</sup>の解釈が重要である。小沢によると、この箇所には大きく二つの解釈が存在しているという（小澤 1989 : 393-394）。そのひとつは、*šini* を *to'a* にかかる形容詞と読み「新しい数を数えて」と読む。その二は *šini* を *to'ulaju* にかけて副詞として読み、「新たに数を数えて」と読む読み方である（小澤 1989 : 393）。後者の読み方は、モンゴルのダムディンスレンをはじめ、マンサン、エルデンテイ、花賽・都嘎尔札布、さらにラケヴィルツ、クリーヴス両氏が採っており、その事例が提示されている（同頁）。前者の形容詞としての読み方は、ヘーニッシュ、コージン、名か、小林、村上の諸氏が採っているもので、こちらも事例が示されている（小澤 1989 : 394）。小沢はこの二通りの読み方は、「内容面から見れば、この二者のいずれに読もうと大した問題ではないが、語学的に見れば、やはり、いずれがモンゴル語としてはベターな読み方であろうかが問題となる」と述べ、さらに次のように続けている（ただし、下線部は筆者による）。

筆者は *šini* をやはり副詞的に読みたいと思うが、その場合には、モンゴル語としては *to'a šini to'ulaju* の語順をとるのが普通であろう。従って、*šini to'a to'ulaju* の原文は、一般的には *šini* を形容詞として読むべきと思われる。しかし、意味面から考えれば、*to'a* - この場合の《数》とは《兵の数のこと》 - を 《新たに数えて→もう一度数え直して》 と解する方が自然と思えるので、筆者としても *šini to'a to'ulaju* を副詞的に解したいと考えるのである。*šini to'a to'ulaju* の語順でも *šini* で少しポーズを置いて、*šini, to'a to'ulaju* と読めば、*šini* を副詞として読むことが出来ると思える（小澤 1989 : 394）。

小沢の上記の解説においては、ひとつの盲点がある。それは下線部の箇所である（§ 265 の転写と邦訳の②を参照）。小沢氏はここで数える数を専ら“兵士の数”であると解釈しているが、実は、この表現は非明示的に別の意味に解釈しうる。別の解釈として新たに提示したいのは、*šini* が *to'a* を修飾する形容詞であっても、副詞であっても、どちらでもよく、本質は兵の数ではなく、時間の数のこと、すなわち年（歳）のことを言っていると解釈するのである。チンギスにとってタングート征伐の時期というのは、チンギスの死期が近づいていた時期であったことを考慮に入れると、この § 265 の冒頭は意味のある事柄を伝えているように思われる。つまり、この表現は“新しい年を数えて”すなわち、“次の年に”という意味に解釈できるのである。

当該箇所をよく見ると、チンギスがタングートに出征しようと思決意したのは“その年の冬”であったにも関わらず、問題の表現 *šini to'a to'ulaju* のすぐ後の位置には、実際に出征したのが *noqai jil namur*（戌の年の秋）であったと記されている。“その年の冬”から“その年の秋”になることはないので、出征した秋の戌の年は、“その年の冬”の次の年に当たるはずである。このことは、*šini to'a to'ulaju* を“次の年に”と解釈することと整合性を持つ。

なぜこのような迂回した方法で記されているのかといえ、チンギスの老いの問題を隠蔽するためであろうと思われる。つまり、チンギスはタングート征伐を思い立ったのに、すぐにはそれを実行できず、二つの季節の後に実行に移しているのである。つまり、*šini to'a to'ulaju* は、その非明示的な意味と

して“また歳を一つ取って”という含意を持つと読むのが妥当だろう。そもそも、兵数を実際の出馬時期の二つの季節の前に行なうというのは奇妙にも思われる。二つの季節とは半年の期間を指すので、平時でなく、まさに制圧にかかろうとしているときに、半年も前に兵数を数えるのはあり得ないであろう。むしろ、この *šini to'a to'ulaju* を後続の狗の年の秋に行なったことであると読めないことはないが、兵数であれば、出馬を思い立った時に数えるのが自然なので、後続の「狗の年の秋」に掛けるのではなく、①の「タングートの民に出馬しよう」という前の箇所にかけて読むのが妥当だと考える。

チンギスの老いという含意が見えにくくなっているのは、当該節において④～⑨でチンギスの落馬という出来事が記されているので、不注意に読めば、この事件と連動して読んでしまうからである。しかし、叙述の順序はチンギスの落馬→二つの季節の後の出馬ではなく、二つの季節の後の出馬（①～③）→チンギスの落馬（④～⑨）の順だということに注意する必要がある。

明示的には、チンギスの落馬は単なる不慮の事故として描かれているが、タングートに征伐した際の巻き狩りで、この出来事が記されていることは偶発的な事故ではなく、非明示的に“チンギスの老い”を示しているといえる。なぜなら、いかに馬が野生の騾馬の群れに驚いたからといって、チンギスが乗り慣れた馬から振り落とされているからである。これは落馬という形で直接的に“チンギスの老い”が示されているのである。ここで“乗りなれた馬”と表現した理由は、ジョストウ・ボロという馬の傍訳に馬名とあり、この馬がチンギスの愛馬であったことを示唆しているからである。

以上のように、チンギスのタングート征伐は、二つの季節の後の出馬（①～③）→チンギスの落馬（④～⑨）の順で当該節は始まっているのであるが、①～③の非明示の意味がわからなくても、チンギスが乗りなれた馬から振り落とされるということの含意を読み取ることは可能である。不慮の事故であったとしても、落馬はチンギスの体幹の衰えを示しているのである。つまり、非明示的に、§ 265 の冒頭の①～⑨は“チンギスの老い”が示されている箇所なのである。

“チンギスの老い”と連動して引用しておきたいのは、小沢が前述の問題の表現である *šini to'a to'ulaju* の冒頭の *šini* が、モンゴル語の文語形の“新”という意味を表す *šine* ではないと指摘していることである（小沢 1989 : 393）。当該箇所は、原文では“新”ではなく“失怎”となっている（小沢 1989 : 393, 栗林均・确精扎布 2001 : 559）。小沢のこの指摘に基づくならば、*šini to'a to'ulaju* の *šini* を“新”と音訳するのは、“チンギスの老い”を示している非明示的内容として違和感がある。つまり、当該箇所では、“失怎”というような“失”という漢字が用いられていることは、非明示的内容と合致していると言えるのである。

実は、先に論じた § 266 もまた“チンギスの老い”という側面から読み取れる内容となっていることを指摘したい。当該節の非明示的内容としては、チンギスを暗殺した下手人としての候補者として *Jüyin\_irgen*（虬の人々）を除外するという意味があると述べたが、チンギスは最も信頼のおけるボオルチとムカリに *Jüyin\_irgen*（虬の人々）を任せた背景には、§ 265 と同様に、老いの問題があったと考えられるのである。

いずれにせよ、§ 265 は § 266～§ 268 における非明示的意味内容を踏まえると、その内容をチンギスの生老病死の“老”という側面からとらえることができる。ただし、補足が必要なのは、ここで示した

のはあくまでも非明示的内容であり、チンギスは当該節の後半部分でタングート征伐をおこなって成功しているの、秘史の「作者」としては、明示的にはチンギスの健在ぶりを示そうとしていると言える。秘史の「作者」がこのタングート討伐に参加していたかどうかはわからないが、ここで記されている内容の基になった事件はおそらくイエスイ妃を通じて知ったのではないかと考える。なぜならば、秘史の「作者」はイエスイあるいはタタル集団に同情的であったからである（藤井 2010a, 2010b, 2011a, 2011b）。

### 3. 2 § 265 の後半部分における非明示的内容—ブルカン王の擁護—

次に、§ 265 の後半部分である㊸以降を考察したい。とくに、タングートに焦点を当てて内容を検討することにしたい。ここで、明示的に語られているのは、タングート内部におけるブルカン王とアシャガムブの会話に見える両者の主張の隔たりである。タングートが一つの政体であったという観点から眺めると、タングートでは、アシャガムブを筆頭とする軍部の暴走があり、ブルカン王はこの暴走を止めることができなかったということになる。アシャガムブは初出の続集巻一の § 256 においてもチンギスへの横柄な言動をとっており、当該節におけるチンギスへの横柄な態度は一過性のもものではなかったことが理解される。つまり、ブルカン王には政体を保持するための能力がなかったということを示しており、タングートの滅亡はすでにタングートの内部に用意されていたことが明示的に示されている。

しかし、非明示的レベルにおいては、このブルカン王とアシャガムブの主張の隔たりがブルカン王を擁護するものになっていることに注目する。つまり、ブルカン王 v s アシャガムブは非好戦的 v s 好戦的というように重ねあわされており、チンギスの真の敵はブルカン王ではなく、アシャガムブという奸臣だったという内容になっているのである。要するに、タングートの悪者をアシャガムブ一人に押しつけることによって、ブルカン王を擁護しているのである。

## 4. 結論と今後の課題

### 4.1 結論

本論の結論として、2. と 3. の議論を要約しておくことにしたい。まず、2. においては、非明示的内容として、イエスイ妃とトルン侍従がチンギスの死に関与していたのではないかと仮説を提起し、2. 2 でその仮説の妥当性を検証した。具体的には、2. 2. 1 で彼らの近親者がチンギスに殺害されていたという事情に言及し、動機的に可能であったことを指摘した。そして、2. 2. 2 では、仮説を基にすると、イエスイの場合、チンギスの死に言及されている § 268 のイエスイ妃へのタングートの民の付与についての文の読み方が理解可能なものになることを指摘することで、イエスイによる暗殺の関与はありえることを示した。もう一方のトルン侍従の場合も、同 2. 2. 2 で、トルン侍従がチンギスの命令に背いてブルカン王を殺害していなかった可能性を指摘することで、トルン侍従によるチンギス暗殺への関与についてもありえることを示した。そして、イエスイとトルンは個別に暗殺に関与しただけでなく、両者は密かに共謀していたと思われる理由も明示的に確認できるとした。明示的な行動をみると、両者共に 1) 落馬したチンギスの身体を労わって、2) タングート征伐を延期させようとしていた点で一致しているからである。続く 2. 3 においては、イエスイとトルン侍従がチンギス暗殺に関わったのは復讐劇という側面もあったが、死の間際においてタングートの民を皆殺しにしようとするチンギスの過

剰な命令を制止することによってチンギスの名誉を守ろうとする救済劇でもあった可能性を論じた。この議論においては、§ 265 と § 268 を対照した場合、前者の節ではチンギスはタングート人にも役立つ者とそうでない者がいることを理解していたにも関わらず、後者の節ではチンギスはタングート人を十把一絡げに扱っており、迫りつつある死という状況においてチンギスの認知能力が著しく低下していたという点を指摘しておいた。ただし、動機があったとしても実際に殺害ができたかどうかは別問題であるので、彼ら以外の者によるチンギスの暗殺が物理的・空間的にも難しかったということを 2. 4 と 2. 5 で示した。

具体的に言うと、2. 4 においては、§ 267 で叙述されているチンギスとブルカン王の接見した場所が「戸の暗がり」と書かれていることに着目し、すでにこの両者の接見の時点でブルカン王がチンギスに物理的に接近できなかったことが重要な非明示的内容である可能性を指摘した。チンギスを暗殺する下手人として物理的な可能性の有無が秘史で考慮されていることを受けて、イエスイやトルンがチンギスに物理的接近ができたか否かについて着目した。イエスイの場合、§ 265 において落馬事故で“夜に”発熱していたチンギスの状態をチンギスの息子や長官たちに“翌朝”知らせたと書かれていることに基づくと、近親者のうちでチンギスの最も近くにいた人物であることが浮かび上がった。もう一方のトルンにしても、タングート征伐の延期をチンギスの息子たちや長官たちに“最初に”進言しているところから、チンギスの廷臣の中では最も近くにいた人物であったことが推測された。以上、イエスイとトルン侍従は、動機だけでなく、物理的・空間的にチンギス暗殺が可能であったと論じた。

続く 2. 5 では § 266 を対象に論じたが、当該節における明示的内容は、チンギスがボオルチとムカリに恩賞として“キタドの虜の人々”を等分に与えたというものであるが、この非明示的内容としては、チンギスが病のために、腹心の二人に分け与えることによって、“外国人傭兵部隊”である *Jüyin\_irgen* (虜の人々) を遠ざけて身の安全を図ったということを指摘した。つまり、ここでは、チンギスの祖先アムバガイ・カアンがタタルの *Jüyin\_irgen* (虜の人々) によって金国で殺害されたことを考慮に入れた上で、チンギスの下手人の候補者リストから *Jüyin\_irgen* (虜の人々) が排除されていることを論じた。さらに、§ 266 における“カラ・キタド虜の人々”と呼ばれる人々が“タタルの虜の人々”のことを指すという解釈ができることを示し、タタルという集団名が回避されていることを指摘した。これに関連して、チンギスにとってはアムバガイ以上に父イエスゲイの横死の方が重要であったはずなのに、イエスゲイの横死に関わったタタル集団についての言説が欠落していることを指摘した<sup>25</sup>。これに連動して、トルンについてはコンゴタン出身者であることが明示されているのに対して、イエスイについてはタタル出身者であることに関連節においては一度も言及されていないことを指摘した。以上の3つのことは、当該節においてタタルへの言及が徹底的に回避されていることを示している。このことは、非明示的レベルにおいて、タタル出身のイエスイ妃がチンギスを暗殺した下手人である可能性を逆説的に示しているとした。

チンギスの死に関わる叙述の範囲は § 265 からチンギスの死に言及されている § 268 までであることを指摘し、3. 1 においては § 265 を対象に考察を行った。3. 1 においては、当該節がチンギスの“老い”が非明示的レベルでテーマになり出した節であることを、*šini to'a to'ulaju* という表現についての検討を通して明らかにした。3. 2 においては、タングート陣営における亀裂という明示的レベルの内容は、悪者の役割をアシャガムブという奸臣に帰すことにより、ブルカン王が擁護されるという非明示的内容とな

っていることを指摘した。そして、このブルカン王を擁護する内容は、本論の仮説と整合性を持つことを指摘した。

以上が2. と3. の要約である。このように、本論では、チンギスの死にはイエスイ妃とトルン侍従が関与していたという仮説を検証してきたが、結論としてはこの仮説は有効なものであることが示された言えよう。

本論では、仮説の検証のために、続集二の § 265～ § 268 の範囲を § 268→ § 267→ § 266→ § 265 というように叙述の流れを逆方向から考察したので、以下においては、改めて、叙述順すなわち § 265→ § 266→ § 267→ § 268 の順でそれぞれの節でどのような非明示的内容が明示的内容との対比で存在しているのかを表1として以下に整理して示しておく。表1を見ると、英雄叙事詩の構造を遺憾なく示し、すべての項目で明示的内容と非明示的内容が対称的な関係になっていることが確認されるであろう。

表1：続集二の § 265～ § 268 における明示的及び非明示的内容

節		明示的内容	非明示的内容
§ 265	a	イエスイ妃はチンギスが具合の悪いまま夜を過ごしたことをチンギスの親族と長官たちに翌朝伝え、タングート征伐への対応を協議させた。それゆえ、イエスイは心優しい夫人である。	イエスイ妃が容態の悪いチンギスの傍にいたことができた唯一の女性である。それゆえ、イエスイはチンギスを暗殺した下手人の候補である。
	b	トルン侍従がチンギスの健康状態を労わり、チンギスにタングート征伐の延期を進言した。ゆえに、トルン侍従はチンギスの腹心である。	トルン侍従はイエスイ妃と共謀していたのでタングート征伐を制止した。ゆえに、トルン侍従はチンギスを暗殺した下手人の候補である。
	c	チンギスがサルタウル征伐後に西夏征伐に出馬するという観点からみて、チンギスは健在である。	チンギスがサルタウル征伐からすぐに出発できず、落馬もするという観点からみて、チンギスには老いの兆候がある。
	d	タングート内部でブルカン王とアシャガムブの亀裂が示されているという観点からみて、ブルカン王には統治能力がないことが示されている。	タングート内部でアシャガムブだけがチンギスの敵で、ブルカン王は敵ではなかったという観点からみて、ブルカン王が擁護される存在であることが示されている。
§ 266		チンギスがボオルチとムカりに恩賞として“キタドの乳の人々”を与える。	チンギスを暗殺した下手人の候補者リストから“キタドの乳の人々”が排除される。
§ 267	a	ブルカン王がチンギスに“戸の暗がり”で謁見する。	チンギスを暗殺した下手人の候補者リストからブルカン王が排除される。
	b	トルン侍従がブルカン王を殺したと報告する。	トルン侍従はブルカン王を殺さずにいた。
§ 268	a	チンギスは自然死した。	チンギスはイエスイとトルン侍従に暗殺された。

	b	イエスイ妃はチンギスの死後、(チンギスカ ら) 多くのタングートの民を付与された。	イエスイ妃はチンギスの死後、ブルカン王から多くのタン グートの民を付与された。

## 4.2 今後の課題

今後の課題としては、本論で積み残した課題として大きなものを3点列挙しておきたい。

1) tenggeri- türür qar=ba における tenggeri (天) が möngke tenggeri (永遠なる天) と同一の概念であるのかどうかについての検討 (2.3 参照)。

2) Qara Kitat / Qara Kitad (カラ・キタド) と Kitad / Kitat (キタド) の用例の詳細な検討 (2.5 参照)。

3) §265 の㉔の elčīn-i mūn ene Čo'orqat-ta sobila-ju üge an-u (使者を (?) まさしくこのチョオルガトで療養して) の箇所を検討 (3. 参照)。

最後に、本論のテーマであるチンギスの死に関連して、筆者は秘史におけるイエスイ妃に関する叙述をブルカン王の妻グルベルジン・ゴア妃の伝説と絡めて論じたことがあり (藤井 2010b)、当該伝説の非明示的内容は本論の内容と符合していることを指摘しておきたい。本論においてはこの伝説については一切触れなかったものの、非明示的内容の共通性は本論の隠れた傍証ともなっていると言えるので、二つの考察の整合性についてはまた別に論じることにした。

## 引用文献

### 【日本語】

小沢重男 (1989) 『元朝秘史全訳続攷 (下)』 風間書房

栗林均・确精扎布編 (2001) 『元朝秘史』 モンゴル語全単語・語尾索引』 東北アジア研究センター叢書第4号 東北大学

藤井真湖 [=藤井真湖] (2001) 『伝承の喪失と構造分析の行方—モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公』 日本エディターズスクール出版部

藤井真湖 [=藤井真湖] (2003) 『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』 風響社

藤井真湖 (2010a) 「『元朝秘史』 第53節～第68節の有機解釈の試み—“ベルグテイの母”の出自の仮説をもとに—」 『言語文化学会論集』 第34号, 167-179頁

藤井真湖 (2010b) 「『元朝秘史』 第268節におけるイエスイ妃に関する叙述—グルベルジン・ゴア妃の伝説から見た解釈—」 『愛知淑徳大学現代社会研究科論集』 第5号, 77-94頁

藤井真湖 (2011a) 「『元朝秘史』におけるベクテル、ベルクテイ、“ベルグテイの母”の考察—ベルグテイの母の出身仮説をもとに—」 『愛知淑徳大学現代社会研究科論集』 第6号, 21-41頁

藤井真湖 (2011b) 『元朝秘史』の地の文における“我々”表現に隠された意図—巻3第110節～巻11第263節における一人称複数形についての考察—」 『愛知淑徳大学現代社会研究科論集』 第7号 45-66頁

藤井真湖 (2013) 『元朝秘史』の“モンゴル英雄叙事詩”的研究—原題に残る伝説から『元朝秘史』の物語分析へ—」 『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』 第15号 43-70頁

藤井真湖 (2015) 「『元朝秘史』におけるアムバガイ事件—クトゥラ関与の仮説に基づいて—」 『愛知淑徳大学論集—グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』 第7号 11-32頁

藤井真湖 (2018) 『『元朝秘史』におけるホエルン夫人の隠された再婚—繰り返された再婚とその破綻の仮説—』『愛知淑徳大学論集—交流文化学部編』第 8 号 1-22 頁

藤井真湖 (2021) 『『元朝秘史』におけるデイ・セチェン—デイ・セチェンがイエスゲイ・バートルの死に関与していたという仮説に基づいて』『愛知淑徳大学論集—グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 13 号 11-27 頁

村上正二 (1970, 1972, 1976) 『モンゴル秘史 1～3 チンギス・カン物語』東洋文庫 平凡社

ロラン・バルト (1979 [原文は 1977]) 「物語の構造分析序説」『物語の構造分析』(花輪光訳) みすず書房  
【中国語】

拉施特／余・周『史集』(1983) : 拉施特主编 余大均・周建奇《史集》第一卷第一分冊 (1-1)・第二分冊 (1-2), 商务印书馆

【英語】

Cleaves=Francis Woodman Cleaves(1982):*The Secret History of the Mongols, Translated and edited by FRANCIS WOODMAN CLEAVES*, Harvard-Yenching Institute.

Rachewiltz=Igor de Rachewiltz (2004) *The Secret History of the Mongols: A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth century*, BRILL, Volume Two

【モンゴル語】

Дамдинсүрэн,Ц. (1957) Монголын Нууц Товчоо (Хоёр дахь Удаагийн Хэвлэл), Улсын Хэвлэлийн Газар, Улаанбаатар

## 注釈

<sup>1</sup> この表現が本論においてチンギスの死の意味として解される理由は、当該表現の後、チンギスに言及されることがなくなっているからである。本論の研究の枠組みにおいては 1.4 の方法論を参照されたい。

<sup>2</sup> 村上によれば、アシャガムブは秘史以外には見えぬ人物だが、当時の西夏国の性格や国内状況を知る上できわめて重要な存在だという (村上 1976 : 202)。

<sup>3</sup> チンギスの死因に関する諸説については、村上による解説を参照 (村上 1976 : 271-274)。

<sup>4</sup> 筆者はロラン=バルトの構造分析を参照枠組みとしてモンゴル英雄叙事詩の研究をおこなってきたが、その研究の土台は西モンゴルの『アルタイ・ハイラハ』という英雄叙事詩である (藤井 2001, 2003)。

<sup>5</sup> この方法論で筆者が明らかにした初期の秘史に関する 7 本の論文についての要約は (藤井 2013 : 43-70) を参照。

<sup>6</sup> sümes を“仏像”と訳すことについては小沢の異論もあるが (小沢 1989 : 417-418)、ここでは傍訳の“弗每”に従った。

<sup>7</sup> 本論で「戸の暗がり」と訳した箇所についての緒論は小沢を参照 (小沢 1989 : 418-421)。

<sup>8</sup> § 212 で言及されているトルンの父をコンゴタン集団のムンリク・エチゲと解釈されていることが多いが、秘史には直接書かれていない。『集史』にはトルン侍従がムンリクの息子であることが記載されているので、歴史研究においては仕方がないのかもしれないが、本論のような構造研究においては、この情報なしに解釈に取り組まなければならない。本論における方法論の項を参照されたい。

<sup>9</sup> このムンリク・エチゲとチンギスの実母ホエルンが婚姻関係を何回も結び直していることについては (藤井 2018 : 1-22) を参照。

<sup>10</sup> 『集史』においては直接的にチンギス・カンの没後にブルカン王が殺害されたとは記されていないものの、文脈からそう読める (拉施特 1-2 1983 : 321)。

<sup>11</sup> Rachewiltz は Mostaert's rendering maši ökbe with 'on donna une grande partie' is, preferable to

Cl(=Cleaves),209: ‘one gave exceedingly’ としているが、Cleaves は主語を one としている点で、非明示的の意味を活かしている訳をおこなっていることになる。Cleaves の当該箇所は After that he was ascended, one gave exceedingly unto Yestü Qadun from the Tang’ud people である (Cleaves 1982:209)。

<sup>12</sup> 『集史』においては「酉年 (1225 年) の秋、チンギス・カンはタングートの合申地区を討つために出兵した。彼はチャガタイにオールド後方の二翼軍隊に留まるよう命じ、ジョチは (すでに) 死んでいたが、オゴデイは父親の身辺にいたが、トルイ・カンはソルコクタニベキが失明したことで、数日遅れて、ようやくチンギス・カンのもとに来た」とある (拉施特 1-2 1983 : 317)。

<sup>13</sup> 村上は、この時点で、ムカリもボオルチも既に死亡していたと指摘している (村上 1976 : 268)。

<sup>14</sup> リーダーが病床に臥せている時に、外国人部隊の動きは注意が必要であったと考えられるが、本論での方法論はあくまでも根拠を原文に置くので、ここではこの妥当性については保留しておく。

<sup>15</sup> 本論における“兀”がいかなる人々を指すかについての解釈は村上を参照している (村上 1970 : 69)。村上によれば、『黒韃時略』の説明に基づいて、五十人を一隊として編成された、国境防備のための外人傭兵部隊を指すものであったと言い、おそらくは契丹語に由来する語で、最初は遼朝下で保有を許された王侯貴族の私族の軍隊を名ざしたが、次の金朝にはいると、この語は自国の羈絆の下に置かれた北方遊牧民から編成した国境守備隊を意味するように使用されて、奚族から出た「咩兀」、タングト (ママー藤井注) 族から出た「唐古兀」、モンゴル族から出た「萌骨兀」などの多くの兀軍の名が輩出するようになったらしいという。国境守備隊では意味が通じないので、本論では前者の外国人傭兵部隊と解している。

<sup>16</sup> キタドは一般的に“契丹 (=遼) ”、カラ・キタドは“カラ・キタイ (=西遼)”と解されているが (民族的には両者とも契丹人)、ここでは秘史独特の論理を想定して議論していることを断っておく。

<sup>17</sup> 村上はこの箇所を「キタイの民の〔主なる〕アルタン・カンが股肱と頼める寵臣らは、モンゴル人の祖宗を亡ぼしたるカラ・キタド人や兀のものらであったぞ」というように (村上 1976 : 260)、本論で「カラ・キタド兀」と訳している集団を二つの集団に解しているが、モンゴル語で二つのものを並列する場合 qoyar を付加するのが普通なので、本論ではこの解釈を採らない。

<sup>18</sup> このアムバガイ事件は明示的内容とは異なる非明示的内容が存在することについては (藤井 2015 : 11-32) を参照。当該論文における兀の理解は国境守備隊であったため、本論と齟齬がある。これについては整理する必要がある。

<sup>19</sup> Rachewiltz は Note, however, that in § 53 the ‘Jüyin people’ in question are of Tatar, not Kitan, stock. と秘史の理解が間違っているという理解をしているが (Rachewiltz 2004 : 972)、本論では採らない。

<sup>20</sup> イェスゲイの暗殺がタタル集団による毒殺であり、且つ、§ 267 の⑱~⑳に“毒言”という表現における“毒”という語が出現していることを見ると、イェスゲイの暗殺に言及されていないことは偶然ではないことが明らかであろう。

<sup>21</sup> 具体的には、11 : 02 : 03 と 11 : 04 : 06 の 2 例に該当する (栗林均・确精扎布 2001 : 506, 508)。

<sup>22</sup> 具体的には、05 : 11 : 04 (216 頁), 05 : 13 : 02 (218 頁), 05 : 14 : 04 (220 頁), 06 : 26 : 02 (282 頁), そして 08 : 03 : 09 (364 頁) の 5 例である。ページ数は (栗林均・确精扎布 2001) に拠る。

<sup>23</sup> この箇所の解釈の詳細については小沢の解説を参照されたい (小沢 1989 : 397-398)。小沢はダムディンスレン氏の説すなわち、「使者が (帰るまで)」と解釈しているが、ここでは保留にしておきたい。なぜなら、秘史の「作者」も使者として活躍した痕跡があるので、なおさらこの箇所の解釈は慎重であるべきように思われるからである。この考察には (藤井 2011b : 60-62) が参考になるかもしれないが、詳細は別稿に譲りたい。

<sup>24</sup> 小沢はこの ukü-rün yeke üge-tür siqa=n yabu=ya という箇所を Cleaves・那珂・村上の訳文を挙げて批判し、Rachewiltz の訳に近いとしながら、「死ぬ時には一若し死ぬとしても一 (この) 大言 (壮語) に近づいて行こう」と解説し (小沢 1989 : 400)、原文の訳文に「死ぬ時、大言に近づき行こう」 (小沢 1989 : 389)、邦訳だけの訳文に「死する時、(その) 言に近づき行かん」 (小沢 1989 : 392) と訳している。ここでは、小沢氏の訳文をさらに意識した。

<sup>25</sup> イェスゲイの横死にデイ・セチェンも関与していたことについては (藤井 2021 : 11-27) を参照。